

アートでつなごう！子どもと地域、そして未来！  
対話による美術鑑賞ってなんだ？  
講演レポート



市民ボランティアによる対話型鑑賞サポート事業のキック・オフとして開催された本イベント。多くの市民の方々が参加され、市長、教育長も出席し、西東京というコミュニティ全体での今回の取り組みへの意気込みを感じることができた。

第一部では、福が「みる・考える・話す・聴く」と題してレクチャーを行い、アートとは何か、「みる」ということはどういうことか、などACOP（対話型鑑賞）の背景となる考え方を示した。福がレクチャーで強調した、「知識を一方通行的に教え、ひとつの正解を求める教育から、答えのない問いに対してお互いで学び合うことへの変化」が、まさに今回のとりくみでは重要なポイントとなってくるだろう。

第二部では、本イベントをコーディネートしたARDA（認定NPO法人 芸術資源開発機構）の三ツ木紀英氏が司会となり、パネル・ディスカッションが行われた。今回の事業のモデル・ケースとして神奈川県大和市で先駆的な活動を行っている「やまとアートシャベル」のメンバー・アドバイザー、さらに西東京市内の小学校校長などがパネリストとなり、多様な視点から今回の事業の意義について意見が交わされた。



本事業のような、美術館がない自治体において、市民がサポーターとなり、学校現場で教員と共同して鑑賞授業を行うという事例は、全国的にみても西東京市とモデル・ケースとなっている大和市のみで行われており、他に類をみない先駆的な実践である。

この取り組みでは、単に教育の質向上という意味合いもさることながら、パネル・ディスカッションにおいても「家庭内でのコミュニケーションが改善した」「美術のみならず、さまざまな教科・題材での応用が可能ではないか」という意見が挙げられていたように、市民・行政・学校・保護者・子どもなど、異なる立場の人たちが刺激しあうことによってコミュニティ全体が活性化する効果を期待することができる。

コミュニケーションによる鑑賞のみならず、鑑賞によるコミュニケーション / コミュニティが西東京市で生まれることを期待させられるイベントであった。

(文 アート・コミュニケーション研究センター 北野諒)